

Joseph Hall の *Mundus Alter et Idem*

における諷刺とアレゴリーについて

山 内 暁 彦

Satire and Allegory in Joseph Hall's *Mundus Alter et Idem*

Akihiko YAMAUCHI

Abstract

Joseph Hall's *Mundus Alter et Idem* (*Another World and Yet the Same*) is a Menippean satire with an allegorical setting. It has been long neglected because of the difficulty in reading the original Latin text. It was written for readers who knew Greek and Roman classics well. Though John Healey translated the book into English soon after the publication of the original, it was more of an adaptation rather than a translation. This prevented readers from appreciating the book. With the appearance of the new English translation by J. M. Wands in 1981 the situation was changed and we can now appreciate the peculiarity and the intended meaning of the work.

Various themes in Hall's satire can be located in the book. Such things as the Seven Deadly Sins, fearful control by women, foolish deeds of men, superstitious fools, and heretics are satirized one after another. Hall's satire of religion is one of the more interesting parts of his book. The book also incorporates many other elements. For example, illustrations depicting a strange monument and some coins are very conspicuous on the pages of the book. Marginal notes provided by the author are numerous and minute. Even though readers may feel that such minutiae is a nuisance, they are also quite important for understanding the allegorical meanings.

Despite several defects, like the abrupt end of the narrative or the lack of consistency in the method of satire, Hall's *Mundus* can be considered as one of the most important works of allegorical Menippean satire in the history of the satirical books such as More's *Utopia*, Erasmus' *Encomium Moriae*, Rabelais' *Gargantua and Pantagruel*, and Swift's *Tale of a Tub* and *Gulliver's Travels*.

序

本論では、Joseph Hall の *Mundus Alter et Idem* (1605) を取り上げ、Thomas More の *Utopia* や Jonathan Swift の *A Tale of a Tub*、*Gulliver's Travels* などにも言及しつつ、従来あまり論じられることのなかった本作品の持つ、諷刺アレゴリー作品ないしメニッポス作品としての特質を明らかにしていきたい。

作者 Joseph Hall は、聖職者として、あるいはルネッサンスの諷刺家としては著名であるものの、一般の英文学史の著作においてはあまり言及されることがないようである。また、Swift の *Tale* および *Gulliver's Travels* や More の *Utopia* などと比較してみても、Hall の名は、時代的に先行する More の研究書は言うに及ばず、Hall からはかなりの影響を受けたと思われる Swift の研究書においても、纏まって取り上げられることは稀であり、その名が言及されることすらないことも多い。¹⁾ しかしながら、いわゆるユートピア文学や諷刺の文学を取り扱った研究書においては、従来からしばしば彼の名は取り上げられ、その作品の内容が紹介されてきたものである。²⁾

Mundus Alter et Idem は、More の *Utopia* (1517) と Swift の *Gulliver's Travels* (1726) のちょうど中間の時代に書かれ、同じジャンル、すなわち、想像上の航海 (imaginary voyage) の形式を持つ、メニッポス諷刺に属すものの、これらの主要な作品とは取り扱われ方に大きな差があったのである。それは一体何ゆえであろうか。まず、この問いに答えることから始めたい。

1) ただし、例外としては、William A. Eddy, *Gulliver's Travels: A Critical Study* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1923) がある。

2) 例えば、A. L. Morton, *The English Utopia* (London: Lawrence & Wishart, 1952) (邦訳は、A. L. モートン著、上田和夫訳『イギリス・ユートピア思想』(未来社、1967年))や、Krishan Kumar, *Utopianism* (Open Univ. Press, 1991) (邦訳は、クリシャン・クマー著、菊池理夫、有賀誠訳『ユートピアニズム』(昭和堂、1993年))Christine Rees, *Utopian Imagination and Eighteenth-Century Fiction* (London: Longman, 1996) がある。

I

Mundus Alter et Idem (以下 *Mundus* と略記する) は、そのタイトルが示すとおり、本文は主としてラテン語で書かれている。³⁾ 従って、その読者はかなり限定されてしまうことになる。出版当時において、作者 Hall が読者として想定していたと考えられるのは、Hall と同じ世界に属する人々、すなわち英国内においては、Hall 自身が所属したケンブリッジや、オックスフォードの大学関係者ということになろう。ラテン語は当時のヨーロッパの知識人たちの共通言語であったということを考慮すれば、読者はもちろん英国内だけでなく、広く大陸にもいたと言うことができる。しかし、その数は決して膨大な数とは言えないであろう。少なくとも、ラテン語を解さない一般の人々は、始めから読者とはなり得なかったのである。事情は現代においても変わりはない。いや、むしろ知識人と言える人々のなかで、日常的にラテン語に接する機会のある者の割合は、当時とは比較にならない程低いと想像される。現代においては、*Mundus* が原文のまま享受されることは相当難しいことであると言わざるを得ない。

そこで、*Mundus* を取り扱う場合、我々が考慮すべきことは、翻訳の存在ということになる。一般的に言って、翻訳がなされることによって、読者数は間違いなく増大する。早くも原書の出版から間もない1609年には、最初の英訳が出された。これは、Hall の知己であった John Healey によるものである。ただし、この翻訳には様々な問題があるようである。タイトルは *The Discovery of a New World* と改められている。⁴⁾ また、本文も当時の世俗的な英語に移しかえられているだけでなく、かなりの量の文章が挿入されたり削除されたりしている。また、Hall によって様々な言語を素材につくり出された固有名も、Pam-

3) 正式な表題は、*Mundus Alter et Idem: sive Terra Australis Antehac Semper Incognita, Longis Itineribus Peregrini Academici Nuperrime Illustrata. auth: Mercurio Britannico.* という。出版地は Frankfort となっているが、実際には London で1605年に出版されたようである。詳細は、J. M. Wands, "The Early Printing History of Joseph Hall's *Mundus Alter et Idem*," *Papers of the Bibliographical Society of America*, 74 (1980), pp. 1-12を参照。

4) 正式には、*The Discovery of a New World, or A Description of the South Indies, Hetherto Unknowne, by an English Mercury* である。これのファクシミリ版は、(Joseph Hall), *The Discovery of a New World* (Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum; New York: Da Capo Press, 1969)。また、Huntington Brown によって編集された、今世紀の版もある。*The Discovery of a New World (Mundus alter et idem)*, ed. Huntington Brown (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1937)。

phagonia が Eat-allia に、Moronia が Fooliana に、というように、全て英語に変更されている。また、全体として、古典や学問の知識を備えた人向けの知的な文章が、一般人向けの卑俗なものに取って変えられてしまったという見方さえある。例えば、R. A. McCabe は次のように述べている。“The Latin of the *Mundus* was too refined for Healey who wished to interpret the work to a completely different audience.”⁵⁾ また、McCabe は、*The Discovery of a New World* は、翻訳というより、翻案に近いという体裁のものであるとも言っているが、まさにその通りである。⁶⁾

Healey による翻訳の問題はさておき、これによって Hall の原書が、いわゆる「英文学」とつながりを持ったということの意義は認めねばならないであろう。仮にもしこの訳が存在しなければ、次に *Mundus* の全体が英訳されるまでに、さらに400年近く待たなければならなかったことになるからである。

二番目の訳は、Swift の友人であった William King による、18世紀のはじめ頃のものである。ただし、これは、残念ながら全訳ではなく、McCabe によれば、作品の冒頭の六章のみの部分訳である由である。⁷⁾ ただ、この King による翻訳は、Henry Morley が編集したユートピア文学集 *Ideal Commonwealths* (London, 1885) に収録されたので、これによって一定の数の読者を得たはずである。だが、完訳でないという点で、作品の享受の条件が不備であるままに留まったことは否定できない。

三番目にして最新の英訳は、John Millar Wands による1981年のものである。タイトルは、Hall の原著のタイトルに近付けて、*Another World and Yet the Same* とされている。⁸⁾ これは、*Mundus* のラテン語の正確な訳であることを謳っていて、Healey の訳とはそのおもむきが相当異なっている。Healey が削除してしまった欄外の注釈や南方大陸の詳しい地図を、原書のように含んでいるという点も評価されねばならない。この新訳によって始めて *Mundus* の真の姿が我々にも容易に捕らえられるようになったといえることができる。またそれだけでなく、これと Healey の訳とを並べて読むこともできるようになった。抽象的な言い方をすれば、作品の世界が広がったと言えるだろう。本論においては、議論の素材としては、この Wands 訳のものを扱い、ラテン語原文および

5) Richard A. McCabe, *Joseph Hall : A study in Satire and Meditation* (Oxford: Clarendon Press, 1982), p. 324.

6) McCabe, p. 327.

7) McCabe, p. 330.

8) *Another World and Yet the Same: Bishop Joseph Hall's Mundus Alter et Idem*, tr. and ed. John Millar Wands, (New Haven: Yale Univ. Press, 1981).

Healey 訳のものは、必要に応じ、適宜参照するにとどめることとする。

Mundus の翻訳の問題は、*Utopia* の Robinson 訳と平行して考えると理解し易いのではないだろうか。Robinson 訳そのものに関する評価は、いろいろ分かれるであろうが、*Utopia* はこの Robinson 訳があつてこそ、現在のような地位を文学史及び思想史の中に占めることになったのではなかろうか。少なくとも英文学史においてはそうである。*Utopia* と同じように *Mundus* にも Healey 訳があつた。元来ラテン語で書かれたものが、後に英訳されたという点で、両者は全く同じ経緯を辿っているのである。ところが、*Utopia* と *Mundus* とでは、文学史及び思想史に占める重要性の度合いは非常に異なっていると言わざるを得ない。*Utopia* は、これを知らない人はまれだと言える程有名である。これに対して、*Mundus* は、これを知っている人はまれだと言える程無名なのである。*Mundus* の知名度の低さは、英訳者たちの責任なのであるだろうか、それとも元の作品そのものが何らかの問題を抱えている所為なのであるだろうか。この問いに答えるためには、我々は、作品そのものに当たらねばならない。

II

まず、作品の舞台設定について述べよう。*Mundus* の舞台として設定されているのは、Terra Australis Incognita すなわち「知られざる南方大陸」である。アレゴリカルな名前を持つ語り手、Mercurius Britannicus (Healey 訳では English Mercury) は、単身その未知の大陸に渡り、様々な風俗習慣を持ち、様々な生活を営む人々に出合いながら、諸国を遍歴して歩く。これが作品の基本構成になっている。「南方大陸」とは、ギリシャ時代以降その存在が想定され、プトレマイオス以来の多くの世界図に描かれているものの、いまだ誰ひとりその存在を確認したものがいないという、地理学史上、大変興味をそそる伝説上の大陸である。オルテリウスやメルカトルといった、16世紀後半の地図制作者たちの多くも、この大陸を地球の南端を占める巨大な陸塊として描いている。⁹⁾ また、虚実とりまぜた航海の記録がこの南方大陸についての知識を Hall

9) Peter Whitfield, *The Image of the World: 20 Centuries of World Maps* (San Francisco: Pomegranate Artbooks, 1994) (邦訳は、ピーター・ウィットフィールド著、和田真理子、加藤修治訳『世界図の歴史：人は地球をどのようにイメージしてきたか』(大英図書館・ミュージアム図書、1997年))の中には、プトレマイオス、メルカトル以外にも、南方大陸を大きく描いた、ジョヴァンニ・カモーチオやピエール・デスリエ等による珍しい世界図を見ることができる。また、オルテリウスの世界図は、R. A. スケルトン著、増田義郎、信岡奈生訳『図説・探検地図の歴史：大航海時代から極地探検まで』(原書房、1991年) 口絵を参照。

に提供したのである。David Fausett は次のように述べている。

For the southern-land theme, sources were numerous: the voyage-collections of Hakluyt, De Bry, or Purchas; related genres such as geography, cartography, encyclopedias, and cosmologies, and literary tradition itself.¹⁰⁾

当時、世界はその多くの部分がヨーロッパ人にとって未知の領域であったが、Hall は、その中でもとりわけ異彩を放つ「未知の南方大陸」を自らの諷刺アレゴリーの舞台に選んだという点で、当時の読者だけでなく、現代の読者をも引き付けるのである。南方大陸は、現実には存在を疑問視されながらも、存在しないということの確証がなかなか得られなかった。存在と非存在との境界にある、きわめて曖昧なものであるという点で、南方大陸は、現実を含意しながら表面的には現実とは別個の世界を描いているかのように見せ掛けるアレゴリーの手法による諷刺の舞台設定としては、この上ないものであったと言えよう。また、これはユートピア島や、ガリヴァーの訪れるリリパットやフィヌム国とは異なる広大な大陸である。従って、種々の悪徳を体現した国々を、関連のある国同士が互いに接し合う形で、大陸の上に次々に配置することができるという利点も生じてくる。

南方大陸を舞台にした諷刺的な旅行記の類は、Hall 以後、大きな流行を見せる。Foigny や Vairasse (Veiras) をはじめとする諷刺家に創造意欲をかき立てたのである。¹¹⁾ 何よりも Terra Incognita という、いかにも意味ありげで謎めいた表象そのものの持つ魅力が、諷刺家たちを引き付けたのではないだろうか。

ただし、この大陸の存在の曖昧さが、ある種の胡散臭さ、いかがわしさをも伴うものであったことを見落としてはならないであろう。Hall 自身もそのことは気付いていたようである。Swift の時代になると、もはや南方大陸は一種の冗談のようにもみなされ始めているようでもある。その例としては、*A Tale of*

10) David Fausett, *Writing the New World: Imaginary Voyages and Utopias of the Great Southern Land* (Syracuse: Syracuse Univ. Press, 1993), p. 49.

11) Gabriel de Foigny, *La Terre Australe connue* (1676). Denis Vairasse (Veiras) d'Alais, *The History of the Sevarites or Sevarambi* (1675). Foigny と Vairasse の邦訳は、『ユートピア旅行記叢書3 アウステル大陸漂流記／セヴァランブ物語』(岩波書店、1997年) および『啓蒙のユートピア I』(法政大学出版局、1996年) 所収。また、Foigny の最近の英訳は、*The Southern Land Known*, ed. D. Fausett (Syracuse: Syracuse Univ. Press, 1993) がある。

a *Tub* の次の一節が適当であると思われる。

THE first Undertaking of Lord *Peter*, was to purchase a Large Continent, lately said to have been discovered in *Terra Australis incognita*. This Tract of Land he bought at a very great Pennyworth from the Discoverers themselves, (tho' some pretended to doubt whether they had ever been there) and then retailed it into several Cantons to certain Dealers, who carried over Colonies, but were all Shipwreckt in the Voyage. Upon which, *Lord Peter* sold the said Continent to other Customers *again*, and *again*, and *again*, and *again*, with the same Success.¹²⁾

この箇所は、自分自身を Lord と呼び始めた三兄弟の長男の Peter が、いよいよその行状に異常性を加えていくところであり、滑稽な諷刺が Peter の体現するローマカトリック教会に加えられていくところである。“a Large Continent”とは、原注によれば、煉獄を意味するということである。従って、煉獄というものを「発明」したカトリック教会が、直接的な諷刺の対象として想定されていると考えられるのである。だが、その諷刺を支えているのは、南方大陸は、随分いかがわしい存在であるという理解が、作者と読者との間に存在しているということである。少なくとも、*Tale* を書いた頃の Swift の観念の中においては、南方大陸は、かなり胡散臭い、怪し気なものとして捕らえられていたのではないだろうか。このことは、*Tale* の表面上の作者である三文文士による著書のリストにも表れている。この文士は、*Tale* 以外にも11冊に及ぶ著書を今後出版する予定であると言う。そして、その中には、*A Voyage into England, by a Person of Quality in Terra Australis incognita, translated from the Original* という、南方大陸人の著書の翻訳が含まれているのである。¹³⁾ *Tale* という作品の全体像とその語り手とを思い描きながらこの表題を見れば、タイトルから発散される怪しい感覚が理解できるのではないだろうか。

このように、南方大陸に *Mundus* の舞台を設定したことは、この作品にとっての魅力を与えるとともにいかがわしさも付け加えるという、相反する意味を持つことになったと言うことができよう。

12) Jonathan Swift, *A Tale of a Tub*, ed. A. C. Guthkelch and D. Nichol Smith (Oxford: Clarendon Press, 1920), pp. 106-7.

13) *Tale*, p. 2.

III

では、この南方大陸において展開される諷刺アレゴリーの内容はいかなるものであろうか。周知のように、Moreの*Utopia*は、Moreの時代の社会の悪弊が取り除かれた理想郷を描いたものであり、この作品で描かれた島の名が、今日我々が日常的に用いる「ユートピア」という語の語源となったのであるが、一方の*Mundus*で描かれた社会はちょうどこれとは逆の「ディストピア」となっているということが言われている。¹⁴⁾つまり、Hallの当時の社会が抱える悪習を、拡大ないし誇張して描いたものであるという訳である。本論の筆者も基本的にはこの考えに同調するものであるが、事情はもう少し複雑であるようだ。以下においては、*Utopia*や*Gulliver's Travels*を念頭に置きつつ、*Mundus*の内容に立ち入って、このジャンルの問題を考えてみたい。

先に述べたように、*Mundus*は、いわゆるメニッポスの諷刺に属する。ここでこのことを形式の面からもう少し論じておきたい。この作品の本体と言うべき主要部分では、既述のように、主人公兼語り手がその旅行の模様を述べるのであるが、その前に、旅行に出るまでのいきさつを述べた部分が付け加えられている。そこでは主人公と友人2人の、計3人によるやり取りの模様が語られる。その内容はきわめて難解な語句に満ちており、そのあとの作品の主要部分とは著しい対照をなしていることに一読して気付く。ややこしい議論の後に、比較的平明な旅行の記述。全く異なるタイプの文章が、一つの作品の中に並存しているのである。これはまさにメニッポス諷刺の特徴ではないであろうか。*Utopia*の二部構成を踏襲し、Moreに敬意を払った形を取っているかのように見えることも付言しておきたい。

また、本文には様々な注釈が作者自身によって付けられ、一見したところ、あたかも当時の学問的な著作を見るような体裁になっている。本文の記述に注釈が付けられることによって、読者の注意や関心は、様々な方向へ常に逸らされ続けることになる。そして、それらの注の内容は、古典古代の著作への言及や、当時のヨーロッパ世界の様々な事物にまで及んでおり、その注釈の内容の真偽を確認するためだけでも更なる注釈が必要になるという構造になっているのである。この確認作業は、現代の読者にとって特に必要なことであるが、Hallが想定した知的程度の高い当時の読者たちにとっても、事情はあまり変わらなかったのではないだろうか。本文と注とが相俟って、作品の産出する意味の世

14) Kumarは、*Mundus*を“the first of the long line of mocking and satirical anti-utopias”と呼んでいる。(Kumar, p. 46)

界を大きく広げているのである。これは、*Utopia* や Erasmus の『痴愚神礼讃』*Encomium Moriae* と共通する点である。ただ、残念なことに、Healey の訳では、本文が簡単な口語的な英語になり、注釈が割愛されたり、書き替えられていることにより、原書の持っていた特質が、かなり犠牲になっていることを否定できない。翻訳の趣旨が、作品をより広く一般向けに書き替えるということであったとすれば、訳者が想定した読者は、原書の読者とは異なる訳であり、Healey による改変は、やむを得ないことではあったであろう。だが、その結果として、作品の知的程度がかなり下がってしまったことは否めない点である。

では、次に、作品の持つアレゴリーの性格について検討してみよう。この作品には、*Utopia* や *Gulliver* と異なり、アレゴリーの要素が顕著である。作品の内容がアレゴリーであるということは、各固有名詞がヨーロッパの各言語を基にして作られていることだけでなく、作品全体の本文や注釈にもあからさまに示されている。例えば、Pamphagonia とイギリス、Yvronia とドイツが、それぞれ同じ緯度と経度である (Wands, p. 19) という記述や、Cucina という名の町に付けられた “Italian for kichen” という注を読むと、Pamphagonia がイギリスを、Yvronia がドイツを、それぞれ表しているということや、Cucina という町はまるで台所のように食物が豊富であるということが分かるようになっている。これ以外の地名に関しても同様に、ことごとくアレゴリカルな名称が与えられているのである。考えてみれば、作品タイトル自体にも、作品の内容がアレゴリーであることは示されている。*Mundus Alter et Idem* とは「別個にして同一の世界」という意味である。¹⁵⁾「同一の世界」というのは、現実のヨーロッパと「同一」であるということに他ならない。「別個の世界」を描くだけであれば、それは現実を寓意することもない訳である。

しかしながら、このように、自らアレゴリーであると言う事実をこれほどまでに強調し、説明過剰になっていることは、果たして作品そのものの評価にとってはどうだったのだろうか。南方大陸の社会の陰に当時のヨーロッパ社会があまりにも透いて見え過ぎるのである。これでは何の為に舞台を南方大陸に設定し、詳細でリアルな地図まで添えてあるのか理解し難い。作者は、あるいは語り手は、あくまでも南方大陸での体験を記述しているのだ、という姿勢を取り、

15) *Mundus* の日本語のタイトルは、定訳がないようである。菊池理夫、有賀誠は『別の同じ世界』と訳している。(クマー、『ユートピアニズム』77頁) また、高山宏は『もうひとつの同じ世界』と訳している。(M. H. ニコルソン、『月世界への旅』(国書刊行会、1986年) 341頁) 筆者としては、ラテン語の硬い語感を生かして『別個にして同一の世界』と称したい。

作品の内容がヨーロッパ社会のアレゴリーであるということはあまり詳しく説明せず、読者が自分の能力でそのことを発見するようにさせる、という方法を取ることもできたのではないだろうか。作品の姿は大きく変わってしまうであろうが、この方が、少なくとも作者と同等、あるいはそれ以上の知識を持っていると自負するような種類の読者にとっては、より大きな楽しみが得られたのではないだろうか。

だが、Hall の立場に立ってみると、読者の理解力を高く買い過ぎるのもあまり気分の良いことではない、と感じられたのかも知れない。自らの博覧強記を見せつけるということも、この作品の執筆動機の一つとして充分考えられるからである。ここで思い出されるのが、諷刺の目的として諷刺家の言語能力を聴衆あるいは読者に示すことの重要性を論じた、Dustin Griffin の考え方である。

As rhetorical performance, satire is designed to win the admiration and applause of a reading audience not for the ardor or acuteness of its moral concern but for the brilliant wit and force of the satirist as rhetorician.¹⁶⁾

レトリック能力を誇示することが、諷刺一般の目標の一つであるとすれば、諷刺家が内容より形式に重きを置く態度を取ることが、より良く理解できる。そしてその形式も複雑であればあるだけ良い、という考え方を諷刺家が持ちやすいということも。その極端な例が、この *Mundus* であるのではないだろうか。ジャンルの問題に関して言えば、この作品は、メニッポス諷刺として、内容と共に形式面でも、きわめて特徴のある作品であると言える。

また、同じことは *Tale* にも当てはまるのではないだろうか。*Tale* について言えば、筆者はかつてその難解さと Swift の意図について論じたことがあるが、¹⁷⁾ 結局のところ、三兄弟の行状に仮託した宗教諷刺アレゴリーと、銜学的な「脱線」とが複雑に入り交じって、原注のみならず、Wotton による注をも取り込んで、難解な上にも難解な奇妙な文章で成り立った作品を世に問い、世間の耳目を驚かすということこそが、若き諷刺家 Swift の第一に目指したことであったのではないだろうか。*Mundus* を書いた頃の Hall も同様にまだ若年の頃であ

16) Dustin Griffin, *Satire: A Critical Reintroduction* (Lexington, Ken.: The Univ. Press of Kentucky, 1994), p. 71.

17) 拙論「『桶物語』における風刺—その難解さとスウィフトの意図—」『九大英文学』32号 (1989年) 21—37頁。

った。さぞ、両大学の才人達の注目を集めたに相違ない。考えてみれば、*Utopia* を書いた頃の More も若かった。知の冒険心に富んだ才能の産んだ作品であるという点で、*Utopia*、*Mundus*、*Tale* の三者には、互いにあい通じるものがあると言えるのではないだろうか。

IV

ここで、この三つの作品の著者、すなわち More、Hall、Swift の相互の影響関係について概観しておきたい。まず、More については、Hall も Swift も、More を良く知っていたようである。彼らの著作の中には、しばしば More や *Utopia* についての直接的な言及が見られるからである。では、Swift は Hall についてはどのように見ていたのであろうか。Hall という人物を Swift がどのように捕らえていたかに関しては、いまだ研究不足で不分明であるが、一方、作品については、Swift は *Mundus* を知っていたと言えるようである。Guthkelch は、次のように述べている。“The *Tale* itself shows that he knew . . . Hall’s *Mundus Alter et Idem*.”¹⁸⁾ *A Tale of a Tub* の第11章に、“IN Winter he went always loose and unbuttoned, and clad as thin as possible, to let *in* the ambient Heat; and in Summer, lapt himself close and thick to keep it *out* (p. 195).” と書かれているのは、*Mundus* の第3巻 Moronia の第2章の記述に酷似している、というのが彼の論拠である。*Mundus* の Wands 訳では、この箇所は以下のように訳されている。

In the middle of winter they walk along bare chested and with the rest of their body lightly clothed so that the heat may enter more easily and the cold exit. In the summer, however, they don heavy coats and toss a mantle over that, with whatever other clothes they own, so that the heat might not enter by chance. (Wands, p. 70)

また、Healey 訳では、言葉は適当に取捨選択されているようであるが、大意は同じである。

The inhabitants are of a hard constitution, going bare-brested, &

18) *Tale*, p. lv.

thin attired in the depth of winter, to take ayre the better: marry in the heate of summer, they were rugge gownes, and clokes about that, to keep out heate the better: (Healey, pp. 125-26)

ちなみに、ラテン語原文では以下のようなものである。

Media hyeme aperto incedunt pectore, et reliquo corpore leviter amicto; ut eo facilius intret calor, frigus exeat: aestate autem induunt endromida, et superinduunt pallium, et quot habent vestes; ne qua forte calor intrare possit.¹⁹⁾

こうして見ると、やはり Swift は、Hall の原書か、Healey による英訳のいずれか、もしくはその両方を読んでいたような印象である。だが、*Tale* と *Mundus* の二作品の記述が類似しているということだけを以ってこのことの確証であるとは言い難いのも事実であろう。Swift 程の諷刺家であれば、愚かな人間が行いそうなこととして、Hall が描いたのと同じ描写を思い付かないものでもない。また、Swift は、*Mundus* を読んだことのある第三者を介してこのアイディアを得たのかも知れない。さらに言えば、これはあまりありそうもないことであるが、Hall と Swift の両方が、過去の別の著者の言い方に影響を受けたという可能性も否定できないではないか。従って、文章の類似はあくまでも状況証拠に留まるものであるということになろう。

しかし、ここで思い出されるのが、Swift の友人である William King が *Mundus* を訳しかけたという事実である。普通に考えて、Swift がこのことを全く知らずにいたということの方がむしろ想像しづらい。もちろん、こちらの方がそ状況証拠であるに過ぎない。しかしそうであるにせよ、親しい友人の一人が、その手許に *Mundus* の原書を所持していたという事実は、Swift が *Mundus* を読んだことがあるということのかなり有力な証拠にはなるであろう。少なくとも、King は *Mundus* を読んで、その内容を Swift に伝えた第三者の候補であると言えることはできる。²⁰⁾

もし、*Mundus* というタイトルが、Swift の蔵書目録や競売カタログに挙がっていれば、このような詮索は無用であるのだが、残念ながら、彼の晩年の蔵書

19) *The Works of the Right Reverend Joseph Hall, D. D.* ed. Philip Wynter (Oxford: 1863; rep. New York: AMS Press, 1969), vol. X, p. 454.

20) Swift が逆に King に翻訳を勧めたということも考えられる。

の中には、この作品は入っていなかったようである。²¹⁾ また、*More* や *Utopia* と違い、Swift の著作の中に *Mundus* という作品名へのはっきりとした言及はないようである。とは言うものの、これといって反証もないようであるし、以上のことを総合して、Swift は Hall も *Mundus* も知っていたようである、ということが、仮の結論として得られそうである。問題は、Hall あるいは *Mundus* が Swift にどのように影響を及ぼし、それが Swift の人間観や著作にどう反映されているか、ということであるが、ここではこの議論には入らず、この件に関しては稿を改めて検討することにしたい。

V

さて、*Mundus* の内容の分析をさらに続けよう。作品の語り手は、南方大陸に存在する諸国を順に巡って行くが、彼が最初に訪れるのは、大食の国 Pamphagonia である。七つの大罪の一つ「大食」の悪徳を徹底的なまでに実践する住人の風俗習慣がここでは描かれる。この国では、住民は肥満の度合いが著しい程他人の尊敬を多く集め、「げっぷ」は法にかなうのみならず、敬われさえする。(Wands, pp. 29, 34) 次に彼が訪れる Yvronia は、酔っ払いの国である。ここでは住民は皆、飲み過ぎのために自分の名前さえ思い出すことができない程である。そして、この国の法律によれば、盃は常に一杯か空かでなければならず、ワインを水で割ったりした者は、犬と食事を共にさせられる。(Wands, p. 48) Pamphagonia と Yvronia とは共に Crapulia という国を構成している。このあたりがやや煩雑であるのだが、Pamphagonia が大食の国であり、Yvronia が大酒飲みの国であるということで、両者がセットになって Crapulia という国を形作っているというのである。そして、この、Pamphagonia と Yvronia から成る Crapulia という国の記述が、作品の第1巻を成しているのである。

先にも述べたように、この作品全体を通じて、国名、地方名、都市名、河川名などのすべての固有名はヨーロッパの各国語を基にして、何らかの意味が込められたようなものに作られている。Pamphagonia や Yvronia も例外ではない。Pamphagonia については、ギリシャ語の παν「汎」と φαγειν「食う」からなる造語である。Wands によれば、これはまた、古代小アジアの肥沃であったことで知られていた Pamphlagonia という地名の響きを持つものであると言う。(p. 135) また Yvronia については、テキストの原注によれば、“from the

21) Harold Williams, *Dean Swift's Library* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1932; rep. Norwood, Pa.: Norwood Editions, 1974), p. 92.

French word Yvre [ivre] or Yvrongne [ivrogne], which means intoxicated, soft-headed drunkards (Wands, p. 19, n. 5)” のことであり、大変分かり易い説明が施されている。また、Crapulia については、テキストの原注で相当詳細に語源的な解説が加えられている。ここでも主としてギリシャ語に基づく解説がなされている。

ここで作品の舞台設定に関わる問題を指摘せねばならない。この作品はアレゴリーであるということが分かっているが、前述のように、南方大陸を舞台としているにもかかわらず、何故にこれらのような、ヨーロッパ各国語に語源を持つ地名ばかりが多く存在し得るのか、という疑問が生じてしまうのを如何ともし難いのである。南方大陸はあくまでもヨーロッパなどの旧世界とは隔絶した、未知の土地のはずではないのか。現実味、あるいは現実らしさを目指すのならば、そこに存在するものの名前は、ヨーロッパのどの言語とも関係がないはずなのである。その点で言えば、*Gulliver's Travels* においては、地名の案出に関して、大変上手く考えられていると言える。Liliput にせよ Brobdingnag にせよ、どの地名も、全く目新しく耳新しい、いかにもヨーロッパと隔絶した遠方の地名であるかのような雰囲気を持たされているのである。ところが、この *Mundus* という作品では全くそうはなっていない、どの固有名も、ヨーロッパ各国語のうちいずれかの言語の持つ響きと意味とが込められているのである。そして、このことが、きわめて明瞭に分かるようになっているのである。

しかし、このことを以って作品の欠陥であると考えては筋が違ってしまう。そうではなくて、これこそが、アレゴリーとしての意味を必要以上と思える程に強調している、作品の最も顕著な特質である、と考えねばならないのである。確かに、近代以降の物語作品を読み慣れた我々の目には、奇異に映るであろうこの特質は、作品の書かれた年代や、作者の意図などを総合して考えなければ、なかなか納得のいくものではない。こうした点にも、作品の評価における難しさが存するようである。

それにしても、作品中で言及される固有名の数之多さと、それらに加えられた注釈の多様さには、常に読者は驚嘆させられるであろう。同じ一つの都市や河川が、二つの名で呼ばれたりすることも稀ではない。そして、そうした名に必ず注が付けられているのである。さらに近代の版においては、編集者による詳細な注が付けられて、それらを逐一確認して行こうとすれば、読者はかなりの労力を費やすことを強いられるであろう。

固有名に関する注釈の連続を煩雑に感じたり、アレゴリーであるという前提条件には違和感を覚えながらも、読者は、Hall の諷刺を読み進むうちに、これ

らのことがらにも次第に慣れていくであろう。そして、彼は、個々の諷刺の面白さに気付くという過程を経ることになる。その中には、かなり強烈であると感じられるものも少なくない。その最たる例が、食人に関係するものである。一つ例を挙げよう。

If any of these aristocrats of the kingdom [Crapuria] should perish from drinking too much, he is then handed over to the slaves for consumption at one of these solemn feasts (since this entire body is a combination of the most select kinds of food), for it is unlawful that such a delicacy should be allowed to perish lying in the grave. (Wands, p. 29)

という訳で、死んだ貴族は埋葬されずに奴隷の食事になってしまうのである。

Crapuria における目立った要素の一つとして、是非とも言及しておきたいのは、奇妙な碑文が本文中に印刷されていることである。その印刷は、文字がかすれたようになっており、一見したところでは印刷上の不手際が生じてしまったのかと思える。ところが、本文を良く読むと、この文字のかすれは、碑そのものが古いせいで、文字が読みづらくなってしまったのを、忠実に再現してあるということが分かる。文字のかすれは、印刷ミスではなく、意図されたものなのだ。印刷の技術上、いかなる手段を用いてあるか興味深いものでもある。

碑の文字を一種のイラストとして考えれば、本文の活字以外に、印刷上の工夫として、イラストや地図、図表など、種々雑多なものを書物の中に取り込む試みは、それほど珍しいものではない。とりわけ、メニッポス諷刺の作品においてはそうである。単に文章で表現するだけでなく、本文以外の様々な素材を活用して、書物としての体裁に変化を持たせ、本文との間のダイナミックな関係によって作品の表す世界の幅を広げることがしばしば試みられるところである。例えば、*Utopia* には鳥瞰図風の地図が添えられているし、*Gulliver* には、ラピュタ島の飛行の模様を解説した図や、文章製造機械の図が含まれている。

だが、字がかすれた碑文というのは大変珍しい。そして、その内容についても、およそ一般の碑文らしくない、ずいぶん間の抜けたものである。言い換えれば、この Crapuria には相応しい文章になっているのである。これは、碑文のパロディーであるとも言えるだろう。Wands 訳では、以下のようなものである。

I, Omasius, the leader, lord, victor, prince, and god of Fogonia lie

here: let no one mention my name fasting, or pass by hungry, or salute me sober: Let him who can be my heir; let him who wishes be my subject; let him who dares be my enemy. Live ye gluttons and farewell.(Wands, p. 37)

上記引用中の Fagonia とは、Pamphagonia の古名である由。Healey 訳では、すべて大文字を使用し、碑文の持つ視覚上の特色を保つ工夫も見られる。

I ALL-PAVNCH, DVKE OF TENTER-BELLYE, LY HERE
ENTOMBED. DYING A LORD, A VICTOR, APRINCE, A
DEITY. LET NONE GO BY ME FASTING, NOR NAME ME
HVNGRY, NORE SALVTE MEE SOBER. BE MINE HEIRE HEE
THAT CAN, MY SVBIECT HEE THAT WILL, MINE ENEMY
HE THAT DARE. FARE-WEL BELLIES AND BE FATTE
(Healey, p. 48)

ちなみに、原ラテン語でもやはりここだけ全て大文字を使用してある。

OMASIUS FAGONIAE, DUX, DOMINUS, VICTOR, PRINCEPS,
DEUS HIC JACEO: NEMO ME NOMINET FAMERICUS,
PRAETEREAT JEJUNUS, SALUTET SOBRIUS: HAERES
MIHI ESTO QUI POTEST, SUBDITUS QUI VULT, QUI AUDET
HOSTIS. VIVITE VENTRES ET VALETE. (Hall, p. 429)

VI

続いて、第2巻の Viraginia の検討に移ろう。第1巻 Crapulia の諷刺の特徴として挙げられることは、上の例にも示されているように、食べ過ぎ、飲み過ぎの悪徳という、比較的単純なテーマを扱っているということである。そのためあって、諷刺の持つ面白さという面では全体としてあまり上質であると言えない。これに反して、第2巻の Viraginia は、分量こそ第1巻の3分の1足らずであるものの、女性の支配する国や両性具有者の島を描いてあるという、内容の特殊性によって読み手を引き付ける。さらに、Francis Drake を始めとする、当時の探検家たちによる実際の地理上の発見を踏まえた舞台設定がなされ

ており、探検や地理の歴史に興味のある読者であれば、現代の我々にとっても関心の大きい持てる諷刺になっていると言えるだろう。Viraginia は、別名 New Gynia である。すなわち「新たな女性の土地」というような意味である。語り手によれば、他の人々はこの New Gynia を、誤って New Guinea と呼んでいるというのである。これは全く見事な冗談であるとしか言いようのない、とても面白い思いつきである。もちろん、Viraginia は、北米の Virginia の響きを持たせられてもいる。当時の地理上の発見の最先端である東西の「インド」を同時に想起させ、読者の感覚を惑乱するような効果をこの地名自体が持っている」と指摘することができる。

では、この国の住人は一体いかなる者たちであろうか。「女の国」と言うからには、女性だけがいる、ちょうど例の有名なアマゾンの国のようなものであるかと言えば左にあらず、ここには男性も住んでいるのだ。²²⁾ ここでは両性の役割が逆転していて、男性は女性に支配されており、日々、妻の言うことを聞いて、家事に精を出しているのである。

男女が逆転していると言うだけでは誤解を招くかも知れない。既存の価値観が男女の間で完全に逆転させられているという訳ではないのである。例を挙げると、この国では「美」や「雄弁」が女性にとって重要なものであるのだ。語り手が遵守することを誓わされたこの国の法律の最後の条文は以下のものであった。“That I should voluntarily praise women's intelligence, beauty, and eloquence and defend them from all malicious detractors. (Wands, p. 59)” この国の選挙においても、「美」と「雄弁」の二つだけが考量される要素であると言うのだ。(Wands, p. 60) つまり、女性における「美」などというものは、従来の男性中心の価値観そのままに、この国でも尊重されているし、それと同様に重んじられる「雄弁」も、これを「おしゃべり」とでも言い換えれば、女性の属性としてあげつらわれて来た事柄が、そのままこの国の女性には保たれていることになる。これだけを見ても、男女が単に逆転しているとは言い難いということが分かるであろう。

作者は一体いかなる意図でこのような国を描いたのであろうか。女性のための天国あるいは理想郷を描き出すことを単に意図したのであろうか。あるいは男性にとっての地獄というべきディストピアを描こうとしたのであろうか。女性のためのユートピアは、男性にとってディストピアである、というような単純な図式が仮に成り立つとすれば、作者がどちらを意図していたとしても、結果

22) Amazonia は Viraginia とは別に存在している。

は同じになってしまうのであるが。男性の諷刺家が女性に関する諷刺を行うことは古来から大変多いが、読者にとってその諷刺をどう了解するかという問題には、他のテーマを扱った諷刺とはかなり異なる事情が存在するように思われる。こうした諷刺を批評する視点としてフェミニズムの立場に立つことが、現代の時代の要請としては一番相応しくまた必要なことであるという見解を持つ者も多いことであろう。ところが、問題は、この種の諷刺自体が、反フェミニズム的もしくは前フェミニズム的なものであるもので、結局議論そのものが成り立たないと言う事態に陥ってしまうということにある。一般的に高尚であるとは言えない諷刺の中でも、この作品のように、かなり卑俗な面を多く抱える作品においては尚更、高尚で深刻な議論はそぐわないのではないだろうか。むしろ、作品の表層に浮かぶユーモアを、深く考えずに楽しむ余裕が読者には必要となるであろう。おそらく、フェミニズム的な解釈を加えなければ、この、反フェミニズム的もしくは前フェミニズム的作品の記述の中にも評価すべき要素は存在するであろう。少なくとも、我々20世紀の読者にとっては、深く掘り下げるべき意味も、参考にすべき思想性も希薄であると言わざるを得ない。

最も推奨できることは、ここに描き出された奇妙な世界に驚嘆するという素朴な態度であると思われるのである。この件に関して、Tourney は次のように述べている。“The work must not be taken too seriously; undoubtedly it provided Hall with a much needed vacation from academic routine.”²³⁾ このような気楽な読みの態度でこの第2巻に接すれば、女性に関する諷刺がいかに自由に遂行されているかということに気付く。例えば、過度の性的魅力を示す女性に関する諷刺ということでは、Erotium 別名 Amantia という町の近くでの語り手の体験が目を引き。

The women I saw here were slender, gracefully adorned, and (had rouge not removed the loveliness of their complexions) extremely beautiful. All strolled about with an exposed face and breasts. The rest is covered, but with a material of the most extreme lightness and the most splended colors. (Wands, pp. 61-62)

作者は一体どういう気分でこのような箇所を書いたのであろうかと推測するだけでも、読者はこの種の諷刺を読む楽しみが得られるのである、と言っては不

23) Leonard D. Tourney, *Joseph Hall* (Boston: Twayne Publishers, 1979), p. 38.

謹慎であろうか。また、読者だけでなく作者自らも諷刺の楽しみを味わっていたように思われてならないのである。

ところで、語り手は、この国ではあまり居心地が良くなかったらしい。男性にとってこの土地は住みにくい場所であるということをほのめかすために、作者は語り手に次のように言わせているのだと考えられる。彼は、“I sojourned longer than I wished. (Wands, p. 57)” とか “I hated those women and departed quickly. (Wands, p. 62)” と述べている。また、この土地を “so dangerous and corrupt a place” と形容している。ただし、これが彼の本心であったかどうかは、また別の問題である。諷刺作品において語り手が自己の心中を吐露するような場合、彼は本心を語っていないことの方がむしろ多いことに我々は気付いているからだ。語り手がこのように繰り返し不快感を表明しているのは、実は本心を隠しているからであるに違いないと、読者に推測させる効果を持つ時がある。つまり彼はこの国が気に入っているということである。しかし、仮にそうであるとすれば、この人物はかなり尋常でない性向を持っていることになってしまう。それは、男性が女性にいかにして仕えているか、女性からどのような扱いを受けているかといった事柄に関する、非常に極端な記述があるからである。

Among them are some women who practice gymnastics and teach...how to strip the skin off a man's face skillfully, how to rip out his eyes, how to bite his arms, how to dig through his ears, how to pull out his beard—— and they instruct both by precepts and by examples. (Wands, pp. 65-66)

やはり、全体としてみれば、この国は語り手にとっては恐ろしい場所であったというように解釈することが自然であろう。

彼は、なんとかこの国から五体満足で逃れられたのであるが、その理由が、自分は女の国であるイギリスの人間であるということと、見た目があまり良くないことだった、というのであるから、やはりこの第2巻は、徹頭徹尾、冗談の色合いが濃い諷刺であると言って良いであろう。そのために、第2巻は、他のテーマを扱ったこの作品の他の部分と比較しても、個々の諷刺の持つ意味が分かり易いという特質を持つ。フェミニズム的な高級な批評の題材を提供できる思想性には欠けるかも知れないが、軽い読み物としては、第2巻は、ある程度の評価を与えることができるものである。

Milton は、Hall の *Mundus* に関して、僧職にある者には相応しくないものだと、これを強く非難をしていた。作中でも特にこの Viraginia の部分が、彼の印象に残っていたようである。

What if I had writ as your friend the author of the aforesaid *Mime*, *Mundus alter & idem*, to have bin ravisht like some young *Cephalus* or *Hylas*, by a troope of camping Huswives in *Viraginia*, and that he was there forc'd to sweare himselfe an uxorious varlet, then after a long servitude to have come into *Aphrodisia* that pleasant Countrey that gave such a sweet smell to his nostrils among the shamelesse Courtezans of *Desvergonia*? surely he would have then concluded me as constant at the Bordello, as the gally-slave at his Oare.²⁴⁾

引用中の Aphrodisia とは、Viraginia の中の一地方名で、Desvergonia は、その首都である。そこでは住民は四方が透明な家に住んでいる。確かにこの種の記述は、Milton ならずとも、大抵の読者の印象にしっかりと残りそうであるものだ。余りにも性的な要素を多く含んでいることは、諷刺家の文章としては全く問題はないことであるが、聖職者に相応しいものではないという意見もまた、一般的には十分理解できるものである。問題は、諷刺家と聖職者の両面を備えている一人の人間をどう捕らえるかということである。これは人間の持つ多面性の問題とも関わる難しい問題であろう。

Milton の著作にはしばしば Hall の名が言及されている。両者の間の論争は、Hall の息子にまで引き継がれて行ったというものである。Milton と Hall との関わりには、大変興味深い点が含まれていそうであるので、これについても今後さらに研究したいと考えている。

VII

作品の第3巻で扱われる土地は、Moronia である。人間の持つ「愚かさ」がここでの諷刺のテーマである。この国もいくつかの地域に分かれており、それぞれの地名の持つ意味に対応する「愚かさ」を住人は備えている。Moronia

24) John Milton, *Complete Prose Works of John Milton*, ed. Don M. Wolfe et al., 8 vols. (New Haven: Yale Univ. Press, 1953), vol. 1, p. 887.

Mobilis (別名 Variana)、Moronia Aspera、Moronia Fatua、Moronia Felix、そして Moronia Pia の五つの地方名は、それぞれ、移り気、癩癩、単純、思い込み、信心の愚かしさ、という程の意味であるが、これらの国々はまたいくつかの地域に分かれており、上記のものの他にも、メランコリー、怠惰、追従、企画倒れ、先祖自慢といったものも諷刺の対象になっている。全体として、第3巻で我々が訪れる国々は、以上のような様々な愚かしさに取りつかれた、精神的に異常な人々が住んでいる国々であると言える。諷刺の対象が非常に多岐にわたるため、これまでに見てきた作品の前半部分とこことを比べれば、かなり散漫な印象を受ける。一方、この第3巻 Moronia こそが、本作品の中心をなすと思えることもできなくはない。確かに、この第3巻は、作品中では、質量ともに最も充実していると見受けられる部分ではある。

地理上の設定の問題に関して述べれば、Moronia は、ちょうど南極点に位置しているということになっている。そして、太陽から最も遠いせいで、住民に悪影響があるのだという、奇妙な説明が付けられている。これに対して、温度のちょうど良い中緯度に住む者は、心身共に健全であるということも付け加えられている。これは、現代の我々読者にとっては、非常に奇妙に感じられる考え方であるが、古代、中世のヨーロッパ人たちが、赤道は暑くて越えられないと信じていたことなどを考え合わせると、気候や環境に対する人間の先入観念が如何にいいかげんで適当であるかが揶揄されているかのように感じられてくる。実際には、作者 Hall にはおそらくそうした意図はなかったであろうが。また、現代の我々の常識からはおよそあり得ないと考えられる、南極点の真上に人が住むということも、当時の感覚では不自然な展開ではなかったのかも知れない。

Moronia における諷刺は、人間の「愚かさ」一般を扱ってはいるものの、その中心はカトリックや異端を扱った、宗教に関する諷刺である。これは、やはり、聖職者である Hall の最も得意とする分野の諷刺であると考えられる。しかしながら、現代の一般の読者にとっては、宗教諷刺は、普遍的な諷刺であるとは言いがたい。この種の宗教上の諷刺を十全に理解するには、何よりも、カトリックとプロテスタントの教義上、信仰上の相違について、あるいは、異端として一括される各宗派それぞれの特質について、歴史的に幅広い知識が必要になってくる。読者によっては、信仰の問題を諷刺が取り扱うこと自体に、否定的な感情を持つ場合もあろう。また、諷刺の内容を理解するだけでなく、それを楽しもうとするならば、事態は一層複雑になってくる。読者は、一旦、自分の信仰上ないし宗教上の立場を度外視して、客観的な見方で諷刺を眺めるか、

あるいは諷刺家の立場に同調して、読者自身も諷刺の対象を攻撃しているかのような感覚を持つということが必要になると考えられる。しかしながら、これらはいずれも意識的な努力を要するものであり、簡単なことではない。宗教的な立場が Hall とごく近い限られた数の者は別として、ここでの諷刺をそのまま自然に受け入れ、楽しむことができる者は、あまり多くはいないのではないかとさえ思えるのである。その点で、宗教諷刺というものは、たとえ諷刺の強烈さがいくらまさっていても、諷刺の普遍性という面で問題があるのではないだろうか。少なくとも、ここでの宗教諷刺は、大食や飲酒といった一般的な生活上の題材、もしくは女性問題といった性的な事柄に関する題材を扱う諷刺とは、一線を画するものであることは間違いない。どちらが高級か、真剣味があるかは別として、諷刺の分かり易さという面では、著しい差があるということである。Moronia の諷刺に問題があるとすれば、それは諷刺の特殊性ということになるだろう。

そうではあるものの、個別的な諷刺に目を向けると、この作品の他の部分と同様に、非常に顕著な内容を備えた箇所も散見される。以下においては、そういった要素を順に取り出して、作品の価値をできる限り認める方向で論を進めてみたい。

Moronia Mobilis (別名 Variana) では、何ものも確定したことがない、ということを受けて、語り手も、“Don’t ask me for anything certain about this place, dear Reader. (Wands, p. 73)” という前置きの後で話を進めている。また、Vortunius という名の者の墓石には、「特定のある一つのものではなくて、いろいろなもの全てである」ということを繰り返し謳った、奇妙な墓誌が刻まれている。Wands 訳では、それは以下のようなものである。

PASSERBY

Stay, Read, Walk. Here lies

Andrew Vortunius, neither a slave nor a soldier, nor a doctor, nor a fencer, nore a shoemaker, nore a thief, nor a lawyer, nore a money-lender, but all these. Who lived his life not in the city, not in the country, not at home, not abroad, not on the sea, not on the land, not here, not anywhere, but everywhere. Who died not from hunger, nor from poison, nor from the sword, nor from the noose, nor from sickness, but from all. I, H. I., of that man not a debtor, nor an heir, nor a kinsman, nor a neighbor, nor a friend, but all of

these, erected this, not a monument, not a stone, not a tomb, not a castle of sorrow, but all of them; wishing not ill, not good, but both, not to you, not to him, not to me, but all to everyone. (Wands, p. 75)

多少低次元であるものの、これは一種の詭弁としては、大抵の読者に理解ができるだけでなく、特に、彼の死因を実際に細かく想像してみると、かなり滑稽でもある。また、このようなふざけた内容の墓誌は、実際に存在していそうでもある。先に挙げた Duke の碑文と甲乙付け難いユーモアがあると感じる読者も多くいるであろう。

実際のところ、作品のこのあたりは、言及しないでは済ませにくいような目立った要素が連続して表れている。墓誌のすぐあとには、これまた奇妙なイラストが載せられているのだ。それは、矩形、円形、楕円形をした三種類の貨幣の裏と表の図である。矩形の貨幣は、表がヤウスの像、裏が板の上に乗った丸石の図である。板には“ERR.VAR.DUC.”という謎めいた文字が印されているというのだ。円形の貨幣にも絵柄が示されている。表は人物像で、裏は“CONST.LIP.”という文字とカメレオンの絵だ。楕円形のものは、イラストとしてはその輪郭が示されているだけで、意匠については本文の説明があるだけであるが、それによると、表は草の葉の冠を付けた鼻の大きな痩せた顔の絵で、裏には“polypus fish”が刻まれているのだという。三者ともに、大変謎めいたものであるのだ、その図柄によって意味されていることがらは一体何であるのだろうか、という疑問を読者は抱くであろう。つまり、図像や文字が表している事柄が、一体何なのかという詮索を読者がしたくなるように作者が十分に計算しているということである。実際、これらの図や字の意味は、一定の説明を加えることはできても、様々な解釈の余地が残り、結局は完全に解決されないものである。仮に、一定の意味を決定させずに、読者の解釈の行為を作者が意図的に不安定なままにとどめておくということが、この種の作品の持つ特質の一つとして認められるとすれば、これらの貨幣に描かれた図柄や文字（中でも特に“ERR.VAR.DUC.”）は、そうした特色の最たる例であると言えるであろう。もちろん、既述のように、本文中に異質なものを取り込むことによって、作品の外観と内実を多様で多義的なものにするという効果を、これら、貨幣の図像も担わされていると言うこともできる。

VIII

語り手が次に訪れるのは、Moronia Aspera である。この国の第一の部分は Lyperia あるいは Maninconica と呼ばれる。ここでは人々は皆一人きりで暮らしていてほとんど外出しない。ここはメランコリーに取りつかれた愚者たちの国なのである。これと隣接している、Moronia Aspera の第二の部分が Orgilia である。ここの住民は全員 choleric、つまり胆汁質の怒りっぽい人たちであり、驚くべきことに、彼らもまた食人を行う者なのである。我々が既に見た、第1巻での食人を用いた諷刺は、比較的穏やかなものであった。ところが、ここ Orgilia での食人の記述は、それよりずっと強烈である。Orgilia の住民は、常に人間の生肉を食し、その血液で酔っぱらう、というのだ。この土地には、鍛冶屋、死刑執行人、肉屋以外は住んでおらず、肉屋の店先には人間の足が、ちょうど豚や牛の腿と同じように吊り下げられている。さらに人肉食の描写は続く。頭蓋骨で出来た小高い山の上には、the Duke of Courroux の宮殿があつて、そこには一万人の死刑執行人が仕えており、何も知らぬ旅人がここを訪れると、彼の首は Duke のディナーに供されてしまう。“He enjoys Ethiopians in place of thrush, and Englishmen, in truth, in place of quail. (Wands, p. 85)” いくかなる理由でここに Ethiopians や Englishmen が言及されているのかは全く理解し難いのであるが、ともかく、この Duke が常軌を逸した人間であるということは、良く表現されている。ただ、食人の描写もこれほど強烈であると、却って滑稽にすら感じられるのではないだろうか。

ここでの諷刺の意図を考えると、Orgilia という国は、注によれば“Land of choleric fools” であるから、住民は相当怒りっぽいであろうことが予想される。本文にも、“a land arid, sandy, and barren, which produces a people irritable, frenzied, and savage (Wands, p. 83)” と述べられている。またインデックスによれば、Courroux はフランス語で“angry”、“furious”を意味するのだということも分かる。短気な人間や癪癪持ちに対する諷刺であることは明白である。しかし、いくら短気で野蛮で怒りっぽいからといって、それを食人行為に直結させてあるのは諷刺の行き過ぎかとも思える。やはり、ここでの諷刺は、何か特定の諷刺対象を攻撃するというよりも、文章の刺激の強さを表面に押し出すことの方に重きを置いた、ある意味では底の浅いものになってしまっているように思われる。

確かに、食人のテーマは、読者の興味を引き付けやすいものであるだけに、諷刺家にとっては、却ってその取り扱いが難しいものであるのかも知れない。同

じことは、諷刺を読む我々読者の場合にもあてはまる。食人の問題は、古典古代の異世界における表象からはじまり、コロンブスの新大陸「発見」にまつわるカリブ、カニバルの表象、そしてさらには貧困や遭難などの極限状況における実際の食人行為に至る、非常に巾の広い視野を持った論議が必要になることは、ここで改めて述べるまでもないことであろう。本論では、Hall の *Mundus* という17世紀はじめの諷刺アレゴリー作品においても食人が取り上げられており、それが諷刺の大変注目すべき要素の一つになっていることを確認するにとどめておきたい。

ところで、この章では、地名の付け方に関して疑義があるので、それについて少々述べておくことにする。本文によると、Moronia Aspera は Lyperia (あるいは Maninconica) と Orgilia の二つの地域に分かれている。Lyperia (あるいは Maninconica) がメランコリーの土地で、Orgilia が胆汁質の土地である。すると、この両者を含む Moronia Aspera という名称が問題になる。本文欄外の原注によると、Moronia Aspera はメランコリーの土地であるということである。ところが、語義からすると、Aspera は、ラテン語の asper すなわち「荒い」という言葉から作られていることが明らかである。どちらが正しいにせよ、Moronia Aspera の中にメランコリーの Lyperia (あるいは Maninconica) と胆汁質の Orgilia とを両方を含むということは不自然である。だが、本文の説明でも、本文に添えられた地図を見ても、このような位置関係に描かれているようである。作者はどのような考えで Moronia Aspera の中にメランコリーの Lyperia (あるいは Maninconica) と胆汁質の Orgilia の両方を包含させたのであろうか。これ以外の箇所ではアレゴリーとして各国の名称がかなり熟慮されて設定されている。Moronia Aspera の名称の設定については多少不具合が見られるということである。地名自体が明らかに胆汁質を意味するにもかかわらず、憂鬱質の国であるという注を付けても、それには無理があると言わざるを得ない。このこと自体に何らかの意味があるのであろうか。あるいは、ある間違いを注を付けることで補うという方便が普通に見受けられるものであるとして、そうしたごまかしをすることに関する諷刺になっているという可能性はあるのだが、はっきりしない。何か別の理由があるのだろうか。以上は些細な問題であるかも知れぬが、このような例にも見られるように、この作品はアレゴリーとしてみた場合、細部において不徹底なところが散見されるのである。作品の完成度からすれば、こうした不徹底やいい加減さは、やはりマイナス要因であると言わざるを得ない。

それはともかく、ここでの諷刺アレゴリーは、気分の変化や気質の相違が人

体の四つの体液の働きや分量の差によって引き起こされるという、古来、一般的に信じられていた四体液説に基づいている。従って、これはこれで、大変理解し易いものであると言うことはできる。当時の読者にとっても、この気質説は、例えば、Ben Jonson の *Every Man in His Humour* (1598年初演) や *Every Man Out of His Humour* (1599年初演) などによって、極めて親しい概念であっただろう。現代の我々にとっては、この学説は、あまりにも単純で幼稚な、非科学的な説に思われるものではあるが、ちょうど血液型による分類と同様、誰にでも理解し易いものであることに変わりはない。そのような、万人に理解し易い前提の上にアレゴリーを展開しているという点では、ここでの諷刺は、一般に受け入れられるための要件を満たしていると言うことができる。

さて、次に語り手が訪れるのは Moronia Fatua すなわち単純な愚者の国である。そして、南の部分にあるのが、Scioccia すなわち粘液質の愚者の国である。これは、四つの体液の違いに基づいた諷刺が展開して行くであろうと予想する読者の期待を裏切らない展開である。ここの住民は、アルカディアの動物に人間の形を与えただけの、つまり、獣並みの知能しかないような者たちであり、食物をどの「あな」からとっていいのかさえ分からぬ程の低能ぶりである。Moronia Fatua の残りの部分である Baveria では、人々は少しまともであるものの、羽を付けて空を飛ぼうとする者、卑金属から金を抽出しようとする者など、それぞれが意味のない愚行に耽っている。Baveria は Bavaria を想起させるので、パラケルススを始めとするドイツの錬金術士に対する諷刺を含んでいることが簡単に理解される。また、読者の予期に反して、多血質の愚者の国に相当する名称を持った国は存在しないのであるが、愚にもつかない着想は、過度に血の巡りの良い頭脳から生じるものだとするれば、諷刺の順序から考えて、この Baveria が多血質の愚者の国に当たるということなのかも知れない。

Baveria の Pazzivilla という町では、Swift の描いたラガード学士院を如実に想起させるような様々な企画が実行されようとしている。ある者は、内陸のこの町まで山を越えて海から水を引こうと言い、またある者は、町の周囲に新たな山を築こうと言う。その他のいろいろな意見のいずれもが、どう考えても実現不可能なようなものばかりである。中でも秀逸なのは、以下のような具申である。

...that each house should erect a lofty spire, according to its size, on whose peak a bronze or silver cock with a golden comb would detect the ever-so-changeable breeze. And in every spire he would

place a clock, and to every clock he would add a bell. (Wands, p. 91)

この意見の具申者は、旅人にとっては塔の眺めといいベルの音といい、この上なく良いものになるだろう、と言うのである。この提案は採用されることになる。そして、最後に語り手の感想として、将来この町を訪れる者は、今よりずっと優美になった町を目にするであろう、という文句が付け加えられている。Swift が Lagado 学士院の部分を書いた際に、この一節からヒントを得たかどうかは不明である。だが、次に引用する *Gulliver's Travels* の第3篇の一部は、実際、この *Mundus* の記述を踏まえて書かれたもののように見える。

There was an Astronomer who had undertaken to place a Sun-Dial upon the great Weather-Cock on the Town-House, by adjusting the annual and diurnal Motions of the Earth and Sun, so as to answer and coincide with all accidental Turnings of the Wind.²⁵⁾

Swift の方がのちの時代であるだけに、類似した道具立てを用いていても、企画者が行おうとしていることの難度は、かなり高くなっているようであるだけでなく、文章のスタイルも、Wands 訳と比較した限りでは、無駄のない引き締まったもののように見えるが、如何なものでしょうか。この特定の箇所との類似とは別に、*Gulliver's Travels* の第3篇は、語り手が次々に場所を移って行きながら、珍奇な人やものに遭遇するという全体の構成だけでなく、人間の営為の愚かさを扱っているという諷刺の内容にも、類似性が認められるということを付け加えておきたい。

IX

語り手が次に訪れる Specius という地方までは、住民は、一応人間らしい姿をしているのだが、その次の Lisonica すなわち、追従者の国に至ると、人間の姿形も変型してしまっている。ここの住民は、文字どおり二枚舌であるばかりでなく、顔も二つ持っており、上半身が猿で下半身が犬という、良く分からな

25) Jonathan Swift, *Gullivers Travels*, ed. Harbert Davis, *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford: Basil Blackwell, 1965), Vol. XI, (Part III, ch. v, p. 181).

い形態をしている。相手によって言い方が変わる、相手によって違う顔つきをする、他人の「猿まね」をする、人に「尻尾を振る」、という追従者の振る舞いを記述するのに用いられる表現を、文字どおりに具象化した、いわゆるリテラリズムの手法による諷刺であるかのように見える。「猿まね」は、“ape”という語の第一に表わす語義であるから、日本語と英語の語感是一致的だが、「尻尾を振る」という表現は日本語特有の表現であるようなので、ここでリテラリズムという語を用いるのは厳密には正しくないことは言うまでもない。ただし、犬の持つ色々なイメージの中に「へつらい」は確かに含まれているので、これを一種のリテラリズムの手法と言っても大きな間違いではなかろう。²⁶⁾

しかし、それによって出来上がった姿形は、あまりにも非現実的なものになってしまうことは否定できない。アレゴリーと物語の現実らしさとが上手く調整されていないということである。ともかく、ここでの諷刺の対象となっている追従者は、人間の類型としては我々が日常的に目にするものであり、読者の中にはまるで自分のことを揶揄されているように感じる者も多いのではないだろうか。ここでは先の四体液説に基づく諷刺ではカバーできなかったような、人間の持つ欠点に関しての諷刺が、人体の構造を歪めるという手段で視覚的に遂行されているとも言えるであろう。

次に語り手は、Moronia Felix に行く。ここは、注によれば、ほら吹き、ないし思い込みの国ということである。これだけでは分かり辛いですが、内容を読んでもみると、どんな人にとっても一度は身に覚えのあるような、恥ずかしい振舞いがここでも揶揄されているということが分かる。それは、祖先の自慢であったり、空腹を隠して着飾ることであったり、いずれも、人間の持つ弱さに根ざした、ちょっとした愚かしさというものである。ここで攻撃されているのは、全く許し難い悪徳というようなものではない。我々の周囲と同様に、作者 Hall の周囲にも、おそらく同じような愚かな人たちはいたのであろう。作者のここでの諷刺が、いかに普遍性、一般性の高いものであるかは、特に “Miserable is he who is of low birth,/ But whose heart is born magnanimous and noble. (Wands, p. 96)” という詩文などによく現れている。

Moronia Felix という国には Paradise なるものが存在している。それを描いた The Paradise of Moronia Felix の章では、諷刺の様相はまた変化を示す。ここでは宗教や信仰がテーマになるのである。宗教諷刺が難しい問題を抱える

26) アト・ド・フリース著、山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』（大修館書店、1984年）、177-181頁「dog イヌ」の項を参照。なお、犬における「へつらい」のイメージは、エラスムスの『痴愚神礼讃』がその典拠とされている。

ものであるということについては既に述べたが、以下においては、個々の諷刺における特色を順次挙げて行きながら、議論を進めて行くこととする。まず、作品の中に入れ子のような形で含まれている逸話について述べよう。ここにある神殿は昔、人間ではなく、Fortune によって建てられたものであり、Good Goddess なる女神の社である。この女神のもとには世俗的な願いを持った多くの人々が訪れる。この章には、そういった信者の一人が神殿の人たちによって騙されてしまういきさつを、かなりの分量に渡って述べた部分が含まれているのである。

さて、その信者は、聖なる飲み物と偽った眠り薬を飲まされ、目覚めると、まるで王様のように着飾ってもらい、豪勢な食事をとらせてもらう。ところが、その後、彼は再び眠らされて、前よりもっとみすぼらしい恰好で外に放り出されてしまう。つい今し方味わった幸福が失われてしまったのは、自分の不信心や感謝の気持ちが足りなかったせいであると彼は思い、神殿の連中に騙されたことを疑いもしない。Good Goddess とは、Virgin Mary を表すものであることが、本文や注によって示唆されていて、ここでの諷刺対象はカトリックであることがかなりはっきり分かるような仕組みになっているのであるが、結局の所、信仰心という弱点を利用し、不正な方法で自分の宗派なり宗教の信者を獲得しようと画策するような悪質な宗教関係者に対する、この上なく効果的な諷刺になっていると言える。作者は、この諷刺の為にまとまった分量を割いて、逸話という、これまで用いなかった手法を新たに導入しているのであるが、作品の統一性を保つという点からすれば欠点ともなり得ることを敢えて行った成果は、全体としてかなり上がっていると言えるのではないだろうか。

宗教諷刺は、次の Moronia Pia にまで引き継がれている。この国は、Credulium (地図上での表記は Credulia) と Doxia の二つの地方に分かれている。これら三つの地名はいずれも、宗教に関係する基本単語から作られているので、諷刺アレゴリーもまた宗教に関係することであろうことは、何の説明がなくても分かりそうである。けれども、一応、作者は、注も付けている。それによると、Moronia Pia とは、Land of superstitious fools であり、Credulium と Doxia では、“All are insanely religious and labor either under superstition or under novel and heretical ideas. (Wands, p. 101)” とのことである。

同じ宗教諷刺であると言っても、諷刺の様態は、Credulium と Doxia とでは、かなり異なっているということに注目したい。Credulium で、まず目を引くのは、Cloister of the Morosophers である。Morosophers という言葉はギリシャ語の *μωρος*「愚かな」と、*σοφος*「賢い」とから作られた語である。More

の *Utopia* においても、この Morosophers という言葉は用いられているのであるが、ここではそれについても何の注釈もなされていない。Morosophers という言葉は、実は、既に第3巻の冒頭で読者は目にしている。

Religious clergy wander through all parts of Moronia, certain men named Morosophers, a pious and witty sort of men, belonging to several distinct orders, who have the same influence in this place that the Bonzi have with the Chinese. (Wands, p. 70)

Morosophers という語は、この国にうろついているある特定の宗派の人たちを指す、半ば固有名詞のように用いられているようである。ところで、この箇所でもこの語が *Utopia* と関係があるということなどについての注は、何も付けられてはいない。Morosophers という言葉は、確かにその特徴的な語感から、*Utopia* を読んだことがある者で、多少記憶力が優れた者にとっては、忘れ難い響きを持っている言葉であろう。従って、注などは必要無いということなのであろうか。あるいは、ここで出てくる Morosophers は、More の作品中の Morosophers とは関係はない、ということかも知れない。厳密に言えば、*Utopia* においてこの語は、常備軍の持つ弊害についての議論の中で言及されている。そして、「賢愚たち」という一般的な名詞として用いられている。²⁷⁾ (Yale 版 *Utopia* の、G. C. Richards による英訳では “wiseacres” となっている。²⁸⁾ 一方、*Mundus* では、ある特定の宗教の一派を指すという訳で、文脈も用法も共に異なっている。また、Moronia という国に Morosophers がいる、ということには何ら不自然さはない。いずれにしても、Morosophers という名称を、More と Hall の両者が偶然思い付いたということは考えにくいことであるので、作者はここで、Morosophers という名称を用いることによって、自分の諷刺を More の諷刺とつなげていると考えて間違いなさそうである。ここで読者は、Morosophers という名称に導かれて、*Utopia* という作品全体を一挙に思い浮かべることができるのである。

ところが、ことは *Mundus* と *Utopia* との関係だけでは終わらないのである。さらに典拠を辿れば、Morosophers という語は、Lucian による創作であるらし

27) トマス・モア著、澤田昭夫訳、『改版 ユートピア』（中公文庫、1993年）73頁。

28) Thomas More, *Utopia*, ed. Edward Surtz, S. J. and J. H. Hexter, *The Yale Edition of the Complete Works of St. Thomas More*, Vol. 4, p. 65.

いということが言われているのだ。²⁹⁾ 元来、この語は、『アレクサンドロス』の第40節において初めて現れたものなのであるようだ。³⁰⁾ ちなみに、Loeb 古典文庫の A. M. Harmon による訳では“learned idiots (p. 227)”となっている。

また、エラスムスも『痴愚神礼讃』でこの語を用いている。痴愚神と同類であるのにそれを否定しようとする類の人間に当てはめて用いられているのであるが、そこでは「瘋癲賢人」との訳語が当てられている。³¹⁾ 渡辺一夫によれば、エラスムスを初めとして、ルネサンス期の人文学者たちは、中世の蒙昧な神学者を愚弄するためにこの語を用いた由である。³²⁾ そうであれば、宗教に関わりがあるという点で、Hall の用法は本来の伝統に即したものであると言えることができる。

さらにラブレーも同じ語を用いている。『第三之書 パンタグリュエル物語』第46章において、“morosophe”という語が用いられているのである。訳語はやはり「瘋癲賢人」となっている。ただし、ここでの文脈におけるこの語の意味するものは、ラブレー独自のものであるようだ。

「我が瘋癲賢人トリブゥレを、拙者がどのくらい畏敬しているかに注意してもらいたい。他の神託や返答は、そなたが孤窮になると断じて、泰平樂をきめこんでいるが、誰のためにそなたの内儀が不義を働き、そなたが孤窮にされるかということは、まだ明示して居らなかった。しかるに、この気高きトリブゥレは、それを言い当てて居る。」³³⁾

全体として、瘋癲は実は賢人である、という意味で、賢人の方に強調を置いたような用法であると言えよう。その点で、「賢人ぶった愚者」という語の元来の意味には変型が加えられていると言えることができる。

以上のように、Morosophers という語だけをとって考察しても、Hall 以前の著名な作者名が、次々と浮かび上がってくるのである。まさに Hall は、Lucian、Erasmus、More、Rabelais などの居並ぶ諷刺の伝統の一翼を担っているということが良く分かる例であったのではないだろうか。

このように、色々な先行作品を典拠としながらも、Hall においては、同じ

29) 澤田訳、『改版 ユートピア』268頁、訳注73。

30) *Lucian*, vol. IV “Alexander the False Prophet”, tr. A. M. Harmon (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1925), p. 226.

31) エラスムス著、渡辺一夫、二宮敬訳『痴愚神礼讃』中公バックス「世界の名著」22『エラスムス トマス・モア』（中央公論社、1980年）、61頁。

32) フランソワ・ラブレー作、渡辺一夫訳『第三之書 パンタグリュエル物語』（岩波文庫、1974年）、461頁。

33) ラブレー『第三之書』、256頁。

Morosophers という語を用いて展開される諷刺の様相は、それらとはかなり異なっていることは言うまでもない。とりわけユーモアの要素が顕著であるようだ。例えば、Moronia の人たちの歩き方は、とても変わっている。“Even when they walk along they delight in crossing themselves: for they move their feet in such a way that one foot placed across the other reproduces the shape of the cross. (Wands, p. 102)” 語り手もまた自ら、自分はここに葬られたいと、本気とも冗談ともつかない言葉を述べる。Moronia Pia の前半は、軽く滑稽な調子が支配的である。

これに対して、後半の Doxia、すなわち異端の愚者の国を扱った部分は、かなり様子が異なっている。次々に言及される異端の名称は、2 ページ足らずの間に20種にも及び、注の分量も、これまでにない程充実している。読者の眼前に展開されるのは、あたかも異端の総ざらいとでも言うべき、圧倒的な博識である。この Doxia の部分だけでも、諷刺の典拠や事実との異同を個々の異端に関して調査していけば、優に一編の研究論文が仕上がるのではないか、と思える程である。Hall 自身の注や、Wands による注釈によれば、それぞれの異端の記述の多くは、Augustine の *De Haeribus* によっているものであることが分かる。とりあえずこの出典に当たることから始めれば良かろう。取り扱われている宗派はすべてが「異端」と呼ばれるものであるから、大抵は有名ではないと思われるのであるが、中には Anabaptists などの有名な宗派に関する記述も含まれていて、関心の持ち方によっては、一つの研究テーマとして魅力的であるかも知れない。それはともかく、この Doxia の部分は、作者と同等の博学を読者にも要求するかのような書かれ方がなされており、作品の特徴の一端をかなり極端な形で表した部分であると言えることができるであろう。

さらに、それぞれの異端の持つ特徴を読むと、それぞれが極めて異常だと思われる教義や儀式を持っていることが分かり、その異常性だけによっても読む者は圧倒されてしまう。これは、その当の宗派以外の者ならば誰にとっても当てはまるのではないかとさえ思われる。例えば、滑稽なものでは、Tacians という宗派に付けられた注を挙げられるだろう。“The Tacians held marriage equal to fornication; therefore they used small beds, and even smaller tables, for they ate no meat. (Wands, p. 104)” また、イメージの強烈なものでは、Montanists を挙げたい。“Those heretics make bread from the blood of year-old infants, blood extracted from puncture wounds, mixing this blood with flour. (Wands, p. 104)” どの異端も例外なく奇妙で誤った教理に基づいた宗教生活を送っているのだ、と言わんばかりの諷刺が展開されて行く。この部

分は、作品全体の中でも、形式、内容ともに顕著な特徴を備えている。作者としてもこれは最も力を入れた部分の一つだったのではないかと想像される。

次の章になると、文章の型はまた元のようになる。諷刺の対象は明らかにローマ法皇である。いろいろな宗教諷刺の最後のまとめとして、法皇に対する諷刺を持ってきたのは、作者にとって最大の敵がローマ法皇であるということなのであろう。ただし、作者の該博な知識と、それぞれの異端の異常性に圧倒された後では、単なる付け足しのように読者には感じられるであろう。それにもなって、諷刺の鋭さにも欠けているという印象をも読者に与えてしまっているのではないかと思われる。

X

あたかも付け足しのように感じられるという点では、最後の第4巻も同様である。ここでは、Lavernia すなわち盗人の国が描かれる。例によって Lavernia も Larcinia と Phenacia とに分かれている。Larcinia は泥棒の国で、ここの住民はまるで鷹のように曲がった爪をしている。一方、Phenacia は詐欺師の国で、彼等は Larcinia 人よりはずっと付き合い易いそうであるが、両方とも “completely barbarous and inhospitable (Wands, p. 107)” であると形容されている。Lavernia には、どういう理由でか、Harpies が住んでいて、旅人を襲うので危険であるといった話が挿入されている。作品の最後の部分は、その内容に乏しい観があり、あまり高く評価できない。

ここで、一体作者はどのような意図で作品の最後に盗人の国の記述を置いたのだろうか、という素朴な疑問が浮かんでくる。諷刺の題材として盗みや詐欺を取り扱うこと自体は、特に珍しいことではないであろうが、作品の最後を締めくくる程の大きなテーマとはなり得ないような気がするのだ。以下は、作品の終わり方について考察して行くことにする。

さて、先程の疑問の答えとしては、作者自身の創作態度に対する自己言及であるということが考えられる。つまり、Lucian、More、Augustine を始めとする先人らの著作に多く依存して、ここまで諷刺アレゴリーを記して来た時、作品の終わりに当たって、剽窃の問題が作者の脳裏に浮かんで来たに違いない。Hall の諷刺が果たして剽窃にあたるか否かは判断が難しい問題であるが、作者の意識としては、おそらく自分の諷刺に関しては、その独自性を強調したいという気持ちが強かったのではないかと想像される。そこで、敢えて作品の最後に、Plagiana すなわち剽窃者の国の記述を置いたのではないだろうか、と考え

るのである。そこで紹介されるのは古典の詩人達による四つの詩行であるのだが、それらの詩行はいずれも、ある者の詩を別の者が言い換えたりしたものである、というような注釈が付けられている。Homer にせよ Virgil にせよ、誰もが似たような剽窃をしているのだということを全体として表現しようとしているもののようだ。そうであれば、たとえ読者が自分の諷刺に対して剽窃であるという非難を加えようとも、その非難は自分にだけでなく、あの Homer や Virgil にも当てはまるものだ、と作者は弁解することができる訳である。あるいは、注釈にあるように、“Homer imitates Orpheus and Musaeus, he does not plagiarize. (Wands, p. 116)” と、模倣と剽窃を区別する立場をとれば、自分も Homer にならって模倣をしたに過ぎない、と作者は弁明することができる。この盗みという主題が作品の最後になって現れてくることに何らかの理由があるとすれば、やはり以上のような事情がその理由の一つとして考えられるのではないだろうか。

さらに、もう一つ考えられる理由がある。先に言及した四つの詩文は、作品の四つの巻を回想させるかのような意味をそれぞれが担っていると考えられるのである。第1巻、大食の国については、“Goddess, sing for me the wrath of Demeter, bringer of splendid fruits. (Wands, p. 115)” という Orpheus の詩が対応する。第2巻、女性国には、“For there is nothing more shameless or dreadful than a woman. (Wands, p. 116)” という詩句が対応することは明らかだ。そして第3巻、愚者の国には、人間の営みの果無さという点に関連して、“One generation of men springs up and another passes away. (Wands, p. 116)” という Musaeus の詩が対応すると考えられるのである。

ここまでは比較的理解し易いのだが、問題は最後の、“And as a man reareth a lusty sapling of an olive tree. (Orpheus)/ In a lonely place, etc. Homer, *Iliad*, 17. (Wands, p. 116)” という詩行であろう。オリーブの若木を育てるということと盗みや盗賊とは、何の関係も無いように思われるかも知れない。だが、『イーリアス』の第17巻の冒頭近くの引用箇所は、メネラーオスとエウポルボスとの戦いの場面であるのだ。メネラーオスがエウポルボスを「討ち取って物の具を剥いだ」という箇所で、美しい花を咲かせていたオリーブが根こそぎにされる、という比喻が用いられているのである。さらに、獅子が牛の群れを襲い、一頭の牝牛をさらってき、その血潮や臓物を喰らいつくしてしまう、という喩えがこれに続く。³⁴⁾ こうしてみると、メネラーオスの活躍の様子

34) ホメーロス著、呉 茂一訳『イーリアス』世界文学大系1『ホメーロス』(筑摩書房、1961年)、368頁。

しさやある意味での残酷さは、盗賊などの、人を襲ったり、物を剥ぎ取ったりする行為に重なり合うとすることができる。

以上の様に、Plagiana の章は、新たなテーマで諷刺を遂行するというよりはむしろ、作品全体の内容を振り返りつつ、作者自身の創作態度における模倣と剽窃の問題を自己言及的に扱っている、これまでにない様態を持った章である、と言えるであろう。

さて、以上のように作品の中の様々な要素に着目しながら読み進んで来た訳であるが、いよいよ我々は作品の幕切れへと至ることになる。思い返してみると、この作品は、七つの大罪のひとつである大食を攻撃することで始められていた。その後に、それに続いて他の六つの罪が一つずつ取り上げられるのだろうかと思いきや、予想に反して、次には飲酒、その次には女性国というように、直接的な形で七つの大罪を扱うという展開にはならなかった。これは勿論、作品の欠点という訳ではない。ただ、異なる構成の仕方もあったのではないだろうかと思えるに過ぎない。七つの大罪を順を追って取り上げるというような手法はむしろ在り来たりであって、そのようにはしないところに作者は独自性を求めたのであるという見方も成り立つだろう。ただし、七つ全てを順々に扱っては来なかったものの、作品の締めくくりはその七つの大罪のうちの一つに再び戻って来た、という訳である。

Codicia すなわち Land of greed では、住民は、まるで四足獣のように常に地面の上に物を探しながら、唸り声を上げつつ這い回っている。イメージとしては、彼等は Swift の Yahoo を先取りしているようにも見える。ただし、彼等は一応市民であり、職業としては、metal workers か farmers か merchants のいずれかであるという。この記述だけを見ると、かなり職業差別的な要素が含まれているようにも思える箇所である。諷刺に関しては、Codicia の部分には、上記の、もはや人間とは思えない姿になってしまった住民の表現以外には、評価すべきものはあまりないようである。この章自体、呆気ないほど早く終わってしまうことも、このような印象につながっているかも知れない。

その後は、これまた呆気ない、結びの言葉らしきもので、作品は閉じられてしまう。語り手は次のように述べる。

These men, these customs, and these cities I gazed upon, was astonished by, and laughed at; and after 30 years, weakened by so much labor of traveling, I returned to my homeland. (Wands, p. 117)

These men, townes, and manners, did I behold, admire, and laugh at: and after 30. yeares trauell, growing weary of wandring, I returned into my native country. (Healey, p. 244)

Hos ego homines, hos mores, has urbes vidi, stupui, risi: annoque demum tricesimo, itineris tanti laboribus fractus, in patriam redii.
(Hall, p. 495)

この結びの言葉のあまりの素っ気なさには大抵の読者が驚かされるであろう。語り手の帰国の経緯などはまったく説明されないし、語り手がこの作品を書くに至った動機や、執筆中の状況などと言う周辺的な事情についても我々は全く知らされることはない。考えてみれば *Utopia* の終わり方も素っ気ない感じであった。本文で全てを言い尽くした、ということなのであろう。しかしながら、普通の物語を見なれた現代の読者にとっては、このような極めて簡単な終わり方は、大変奇異に映ることもまた事実である。一方、作品の始まり方について考えてみると、*Mundus* の場合も *Utopia* の場合も、かなり凝った構成になっており、物語の本体とでも言うべき部分が始まる以前に、かなりの分量の前置きが付けられていることが、両者に共通していることに気付く。こうした点でも Hall は More を意識していたのであろうか。

作品の終わり方についての差異は、個々の作者の傾向の差にもよるとは思われるが、時代的な要素も無視できないことであるだろう。例えば、*Gulliver's Travels* になると、Hall や More とは逆に、作品全体の終わりには、かなりの力点が置かれているのである。航海の全行程を振り返りながら、語り手としてガリヴァーは、帰国後の感慨という形を取りつつ、自らの執筆の動機などを事細かに述べているのだ。この点だけを取ってみても、*Gulliver's Travels* の方が *Mundus* よりも我々現代の読者が一般に思い描く物語の形を、整った形で備えていると言い得るであろう。小説、あるいはもっと広く散文の発展の歴史上にこれらの三作品を位置付けてみても、興味深い関連があるということが分かりそうである。

結 び

ある特定の諷刺が一定の評価を得るのに必要なものは、何であるかを考えた時、様々な要因の中でも最も重要なものとしては、諷刺の対象を選択する際の

着眼点と、諷刺を遂行して行く際に諷刺家が発揮する技術とが挙げられる。いずれも諷刺家の個性と言い換えても良い。それに加えて、諷刺を読者が理解できるか否かの問題もある。Hall の書いた *Mundus* という諷刺アレゴリーにおいて、これらの三点がどのようなになっているかについて最後に考察し、本論のまとめとしたい。

まず、諷刺の対象に関しては、これまでに見て来たように、非常に広範囲に渡っていると言って良いであろう。特に、宗教的な関心に基づいた諷刺がこの作品の大きな特徴の一つに数えられる。それ以外にも、諷刺の文学における恒常的な主題である、女性に関する諷刺や、四体液説に基づいた気質や性格の異常性に対する諷刺などは、着眼としては、とりわけ目新しいものではないにせよ、いろいろな手法による諷刺を展開する素材としては、取り扱い方によっては、諷刺家にとってかなり有望な題材であり得ると言うことができよう。諷刺のテーマをこのように雑多に含んでいることは、作品のまとまりという点からすれば、欠点ともなり得るものだ。しかしながら、この作品のようなメニッペアの諷刺においては、元来、まとまりとか一貫性とかいうものには、あまり価値を認めることはできないのではないだろうか。むしろ、そのような理屈をあざ笑うかのような態度がこの種の文章には相応しい。仮にそうであるとすれば、諷刺の主題が多岐に渡り過ぎると言う批判は、かなりの的外れなものになるであろう。選択された主題が相互に連関を持たず恣意的に選択されていることに関しては、*Mundus* の欠点というよりは特長の一つとして考えるのが相当である。

では、諷刺の技法に関しては、どうであろうか。語り手が様々な国を巡りながら、種々の人々に出会うことによって諷刺が進んで行くという方式自体は、特に目新しいものではない。むしろ、この種の諷刺における常套手段であって、Hall の独自性は発揮されていない。また、語り手についてはどうか。彼の人間像については、あまり確定的なことは読者には分かり辛い。設定としては、大学関係者であり、古典その他の知識もある、ちょうど作者 Hall の分身のような者であることははっきりしている。また、彼は、折にふれて自己の感想や意見を述べはする。場合によってはそれにユーモアが含まれていることもある。しかし、彼が、人間的にいかなる性格であるとか、どのような性向を持っているとかという事柄は、ほとんど全く描かれてはいない。語り手は諷刺を進めるためだけに存在する方便のようなものであり、その役割は、ただ単に諸国を遍歴し観察することだけだと言ったらい過ぎであろうか。もちろん、我々が読み慣れた、一般的な小説の主人公たちとは、大いに性格が違っているのは改め

て指摘するまでもない。むしろ、あまり強い個性を持たないことが諷刺の手段としてだけの存在には必要な条件であると言うことが適当である。無個性な語り手というのは、実は、この種の諷刺によく見られる要素であり、この点でも Hall は独自性を持っているとは言い難いのである。このことを言い換えれば、Hall は、Lucian 以来のメニッポス諷刺作品の伝統に即しているとも言えるのであるが。

Hall の諷刺アレゴリーが備えている個性ということに関して言えば、それは、やはり、先に触れたように、大学関係者による語りが備えていて当然の、博識と客観性ということになるだろう。その点が Hall の諷刺における最大かつ最上の特色であると言って良い。ただし、問題は、読者の理解ということになってくる。これはどのような文学作品においても避けられないことであるかも知れないが、どんなに評価の高い、優れた作品でも、読者の興味、関心の持ち方の差によって、作品中に理解し難かったり、面白さに欠ける部分が見られたりすることになる。*Mundus* のように、ある種、変わった作品においてはなおさらである。これは、作品の内容自体が読者を選択するような種類の作品であるということだけは確かであるようだ。さらに、言語の問題も存在する。現在、我々は、Wands による英訳に手軽に接することができ、本論もそのことの恩恵に浴している訳であるが、元来は、この作品はラテン語によって書かれたものである。それだけでなく、Hall が依拠している古典の類も、その多くがギリシャ語やラテン語のものであるのだ。さらには、地名や人名などの固有名も、ヨーロッパ各国語を駆使して創作されたものであった。そういう訳で、諷刺を理解すること以前に、原書を読むこと自体に困難が伴い、読者はかなり限定されてしまう。結果として、このことが作品自体の知名度の低さにつながってしまった、ということが可能である。確かに、Wands 以前にも翻訳がなかった訳ではない。しかし、Healey の訳にしても、完全な英訳とは言えない面がある。例えば、本論で引用した Homer や Musaeus の詩行などは、Healey の訳ではギリシャ文字のまま印刷されているのである。また、翻訳と言うよりは翻案に近いものでもあった。*Mundus* という作品は、Wands 訳によって始めて我々の目に触れるようになったと言っても過言でない。この訳の出現によって、状況は確かに変化したのである。

最後に、作品の総体的な評価を述べれば、全体として Lucian 以来のメニッポアの諷刺の伝統に則りつつ、Hall 自らの学識に裏打ちされた、多様な主題を扱った、特定の種類の読者に対しては、かなりの興味、関心を持って読まれ得る作品である、と概括することができよう。Swift にもかなり大きな影響を与えて

いるようであるし、諷刺の文学全体の歴史の中で、無視できない存在である。また、南方大陸に舞台を設定しているという点では、地理学をも視野に入れた研究の対象にもなり得るものだ。個々の諷刺には、本論で取り上げた事例を始めとして、かなり強烈さを持った、印象に残るものも多数見られた。全体としては、この作品は今まで不当に過小評価されてきたのではないかと思われる。作品がマイナーであるのは作品自体に何らかの問題があるからではないだろうかという疑念は、結局、完全にはなくなったとは言えない。訳者の責任という問題に関しても、Healey のものは批判的に取り扱いながら、Wands の訳については、これをそのまま無批判に受け入れてしまった嫌いがあることも認めねばならない。本論は、概括的な論になったが、また一方で、扱いきれなかった点も多く残された。よって、今後は、論点をより明確に、この作品をさらに深く研究して行かねばならないと考えている。

それにしても、Wands の訳が出て既に20年近くが経過しようとしているにもかかわらず、*Mundus* の研究の状況については、日本は言うに及ばず、世界的にも盛んであるとは言い難い。我が国においては、研究があまりなされていないばかりか、いまだに日本語訳さえ存在しないのが現状である。小論を契機に、今後ますますこの作品が多く取り上げられ、研究が発展していくことを期待しつつ、論を閉じたい。